

## 記憶の中の扉

庄司真紀子

毎日私が寝た後に帰宅し、起きる前に出社するそんな仕事人の父が一週間もの休暇をとった。小学生であった兄は丁度夏休みだった。

「フランスに行こう。家族旅行だ。」

ある日父が珍しく早めに帰宅し私を含めて家族4人全員を集め言った。当時の私にとつて普段中々会うことのない父と一週間も一緒にいられることはこの上ない喜びだった。しかし今考えてみるとこの旅行は彼なりの償いだったのだろう。家庭の一切を押し付けていた妻に対する罪滅ぼし。母の暗い表情が全てを物語っていたように思う。

次の週、私たち家族はフランスを訪れた。空港に着いてすぐ私たちはホテルに向かった。絵に描いたような一家団欒。私の中の母の笑顔はこの時見たもので止まっている。夕方になり、兄に連れられて私はフランスの街へ飛び出した。日が落ちかけているのにジメジメとしていた。排気ガスで蒸し返された大通りを避

けて歩く内に気がついたら私と兄は一際目を引く大きな煉瓦造りの洋館の前に立っていた。周りには綺麗な手入れされた薔薇が生い茂り、荘厳な門扉が僅かに開いていた。

「入ってみよう。」

言い出したのは私か兄か今となつては覚えていない。ただ一つ言えるのはこの時私たちは館にどうしようもなく魅せられていた。そして門を押しした。

そこからの記憶はない。忘れたのではない。本当に何も思い出せないのだ。青い顔をして洋館から逃げようにして帰り道を歩く兄を見てどう思ったのかももう忘れてしまった。ただ兄に痛いくらい握られた手の感触は今でも鮮明に覚えている。その日の夕食中私は兄に今日あったことは誰にも話さないと言われた。いつも通り兄の綺麗な笑顔で。

そして今、私はかの洋館を目の前にしている。記憶の中の門扉は今もなお僅かに開いている。